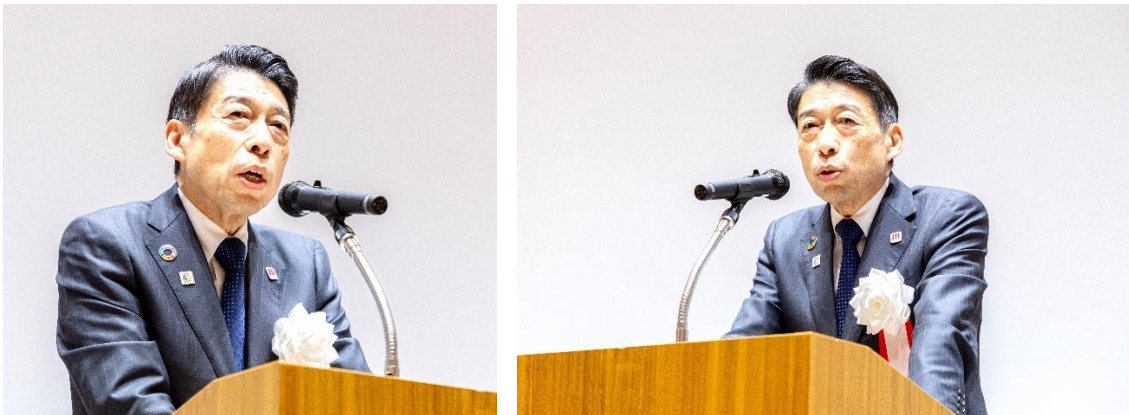


## 「第4回福岡県ワンヘルス国際フォーラム」が開催されました !!

令和6年2月17日（土）、福岡市のアクロス福岡・国際会議場において、「第4回福岡県ワンヘルス国際フォーラム」が開催されました。

今回のフォーラムは、「ワンヘルスによるウェルビーイングの実現」をテーマに、人と動物の共通感染症や薬剤耐性菌等の課題について、各分野の世界トップクラスの研究者がワンヘルスアプローチにより解決することを目指し、取り組むべき内容や連携の在り方について発表するとともに、その先にあるウェルビーイングの実現について考え、世界に向けて発信するために開催されたものです。

主催者として、**服部誠太郎**福岡県知事と**藏内勇夫**アジア獣医師会連合（FAVA）ワンヘルス福岡オフィス所長が挨拶されました。



### 【服部知事：主催者挨拶】

ワンヘルス国際フォーラムは、今年で4回目になります。毎年、国内外の研究者の皆様にご参加いただき、ワンヘルスをテーマに議論をしてきたところです。

私は、この国際フォーラムを世界トップクラスの研究者の皆様、専門家の皆様が、人々の健康をどう守っていくのか、また、動物と人との調和、適切な距離というものをどうしていくのか。あるいは、地球環境の問題もCO2、カーボンニュートラルの問題、そして、マイクロプラスチックの問題、こういった様々なワンヘルスに関わる課題を議論していただき、世界に向けて発信する、高度な専門国際会議として成長させていきたいと考えています。

このために、ワンヘルスの推進に取り組みます国際機関、あるいは研究機関などの専門家の皆様方にご協力いただき、今年、専門委員会を新に設置したところです。この専門委員の皆様方のご意見を踏まえながら、本フォーラムの専門性の向上を図ってきたと

ころです。我々はワンヘルスの推進を政策として、政治・行政を担当する我々にとって、さらに広げていく、推進していかなければいけない。このことは、大きな使命です。このことについても、今後どのような取組を進めていけるのか、さらに考えてまいりたいと思っています。

今後は、FAVA ワンヘルス福岡オフィスの機能を十分に生かし、福岡県とも連携を図っていただき、ワンヘルスアプローチによる調査・研究、あるいは人材育成にしっかりと取り組んでまいりたいと考えています。 (一部抜粋)



#### 【藏内所長：主催者挨拶】

FAVAのワンヘルス福岡オフィス（FOF）が、ここアクロス福岡に入居できたのは、まず福岡県議会が「ワンヘルス推進条例」を作っていただいたこと。そして、その政策をしっかりと知事が立てられて、その実践をいただいていること。それから、福岡県獣医師会が、わざわざ赤坂にある自前の会館を閉鎖して、こちらに同居いただいたということで、家賃をシェアしていただきました。このようなことで、開所することができました。

ここは福岡の天神一丁目一番地です。ワンヘルスというのは、ワンワールド、ワンヘルス。いわゆる、一丁目一番地なのです。だから、ここに開所いただきました。

福岡がどうしてこんなにワンヘルスが進んできたかと申しますと、2013年に横倉会長が日本医師会の会長で、私が日本獣医師会の会長に就任しました。ここで、もしかしたらインフルエンザが豚の体内で変異して、新たな脅威になるかも分からないから、ワンヘルスをやろうということで合意して、日本医師会と日本獣医師会で学術協定を結びました。そして、2016年に北九州でワンヘルスの国際会議を行いました。この時の大会が、非常に世界的に評価を受けました。これが1つの原点になって、福岡が世界に誇れるワンヘルス推進県と言われる由縁だと思います。

ワンヘルスという、この健康というものについて「ウェルビーイング」、いわゆる身体・精神社会、経済的な健康、グローバルな健康づくりを一緒にやっぴいこう。これから、このワンヘルス、ウェルビーイングというのは、時代のキーワードになるのではないかと、思っています。 (一部抜粋)



ラファエル会長



サミュエル部門長

**【基調講演 1】ラファエル・ラガンズ（世界獣医師会会長）**

**「医学と獣医学の対話～人類と動物のウェルビーイング～」**

獣医師の能力は、全体として見た健康にとって重要で欠かせないもの、とみなさなければならない。獣医学の応用は、動物の健康とウェルビーイングだけでなく、人類の肉体的、精神的、社会的ウェルビーイングに貢献する。獣医師の仕事のこうした側面は社会からは見えないことが多いが、人々とその地域社会の健康を守り改善することは、獣医師という職業にとって重要な部分である。ヒト、動物、そして我々皆が共有する地球の健康のために、医学と動物医学の結びつきを強めることが緊急必要なのである。

**【基調講演 2】サミュエル・セバサガヤム（ビル&メリンダ・ゲイツ財団畜産部門長）**

**「低・中所得国における公衆衛生の改善に向けた食糧と栄養のための家畜と魚」**

**※ビデオメッセージ※**

家畜と魚は世界の食料システムにおいて重要な役割を果たしている。特に貧困層や社会的弱者にとって、動物由来食品が最も入手しやすく最も栄養価の高い食品の一つとなっている低中所得国においては、さらに重大である。家畜と魚は、環境の持続可能性、薬剤耐性、動物由来食品と加工食品の消費に関連した健康障害にとって大きな脅威である。ビル&メリンダ・ゲイツ財団は「すべての人が健康的で生産的な生活を送る機会を得られる世界」に貢献することを使命に低中所得国における農業開発プログラムで畜産と水産養殖に取り組んでいる。



トレーシー所長



塩田アシスタントプロフェッサー

**【基調講演3】** トレーシー・ゴールドSTEIN（コロラド州立大学ワンヘルズ研究所所長）

**「進化する課題の解決に向けたワンヘルズアプローチ導入」**

新型コロナウイルス感染症のパンデミック（世界的大流行）は、環境や動物の変化がヒトの健康にどのような影響を及ぼすかを示し強力な一例である。新型コロナウイルス感染症のパンデミックを受け、公衆衛生を最高レベルで守るためのワンヘルズアプローチの導入について多くの関心議論が交わされ、現在ではWHOパンデミック条約やG7・G20の政策文書を含む多くの文書にワンヘルズが盛り込まれている。

ワンヘルズは独自の学問分野などではなく、むしろヒト、動物、環境間の健康のつながりを認識するアプローチであり、動物、人々、植物の接触領域にある複雑な問題に取り組むのに適している。ワンヘルズの導入を成功させるためには、医学、獣医学、公衆衛生学、環境科学、社会科学、工学他、多くの分野の専門家の協力が必要である。

今こそ、ワンヘルズにとって、そして研究機関にとって、ワンヘルズアプローチの導入が、動物、人々、そして地域社会の健康改善にどのように目に見える利益をもたらすかを示し、道を先導する、きわめて重要な時である。

**【基調講演4】** 塩田佳代子（ボストン大学公衆衛生大学院アシスタントプロフェッサー）

**「感染症研究からワンヘルズを目指す～人と動物の健康と幸福～」**

低中所得国の子どもたちにとって、下痢性疾患の問題は依然として深刻である。腸管病原体は胃腸炎を引き起こすだけでなく、低栄養や成長不良の原因となり、長期的な認知障害、学業成績の低下、就学率の低下、成人後の経済生産性の低下につながる。

これらの腸管病原体感染症のかなりの部分は、人獣共通感染症に起因している。養鶏は、動物性タンパク質と栄養の主要な供給源であり、低中所得国における重要な成長・開発戦力として推進されている。腸管病原体、家畜、食品システム、環境には複雑なつながりがあるため、効果的にコントロールするためには包括的なワンヘルズアプローチが必要である。

この包括的なアプローチは、動物、食品システム、環境の相互関連性を強調し、腸管病原体が低中所得国におけるヒトの健康とウェルネスに及ぼす負担を軽減するための持続可能な解決策の基盤を提供するものである。

2024年2月21日

福岡ワンヘルズ協議会・事務局